

# 仏蘭西流行歌最新事情

Francofolies'95の巻

## 西山 教行

Jean-Louis Foulquier とは誰か? 国営ラジオ局 France Inter の日曜の夜の音楽番組“Pollen”のディスクジョッキー、フランスのミュージックシーンを刷新し続けるプロデューサー。彼のイニシアティブで生まれた、フランスそしてフランス語圏最大の音楽祭 Francofolies は、太西洋岸の港町、La Rochelle の夏に欠かせぬ風物詩となった。この町は16世紀以来、北米へ旅立つ者を送り出す港だったが、現在は逆にフランス語圏のアーティストを輸入する港となっている。この11回目を数える Francofolies には、正式招待のミュージシャンだけで100組ほど、それに街角をにぎわせるオフのミュージシャンが加わり、メイン会場となる広場 Esplanade Saint-Jean d'Acres のほか6ヶ所がコンサートに当てられ、95年は7月12日から17日まで連日連夜、街は音のシャワーに包まれた。ちなみに入場料は、メイン会場でのすべてのコンサート(6回)に共通のフリーパスで1万円強とお買い得。というのも文化省、市を始め行政の補助金が重要な財源となっており、入場料は財源の3割にも満たない。国家による文化育成政策の典型である。

さてメイン会場でのコンサートは日没後の午後9時開演とヴァカンス客にぴったり。今年発見の若手、中堅(?),そして大物と一晩に3つのコンサートを楽しめる。95年は Renaud, Bernard Lavillier, MC Solaar, Khaled, Patrick Bruel, Jacques Higelin がエスプラナードに戻ってきた。中でも7月14日の夜は Sinclair, Les Nègresses Vertes, MC Solaar と大物ぞろい。とくに Les

Nègresses Vertes は、La Mano Nègre とならび日本でもお馴染みのアルテルナティブ・ロックの代表格。リードボーカルで作詞を担当していた Helno を事故で失ったにもかかわらず、そのボルテージは下がらず、会場をたちまち guinguette (郊外の森などにあるダンスホール)へと変容させた。

当夜の若手 Sinclair は、1993年にアルバム“Que justice soit faite”を出したと思いきや、翌年には2枚目のアルバム“*Au mépris du danger*”をたちまちリリースし、ファンク・ロック・ソウルをアレンジした洗練されたサウンドを聴かせてくれる。メロディー重視のアンглоアメリカ的ファンクという印象を与えるが、正義、自由、独立を歌い上げているあたり *chanson engagée* の伝統を受け継いでいるというべきか。ライブではギター、ベース、ドラムを中心に、アコースティックの美しさが光っていた。

On ne choisit pas sa mentalité

C'est pourquoi je trouve bien troublant

Que des gens se fassent insulter

Pour des questions d'identité

メンタリティは選べない

だから思うよ、アイデンティティの問題で人々がののしり合っているのは

実に困ったことだと (Tranquille)

その夜の最後を飾った MC Solaar は、数人のダンサーとプレーヤーという、ビデオクリップに登場するかのような装いで舞台に現れた。アフリカ中央部のチャドを幼い頃に



MC Solaar

離れた Claude M'Barali (MC Solaar の本名)は、2枚目のアルバム“Prose combat”で、その *littérature* (*littérature* と rap を組み合わせたもの)にますます磨きをかけている。それもそのはず、愛読書は17世紀に編纂された Furetière のフランス語辞典。言語に対する嗅覚の鋭さ、造詣の深さは他のラッパーと比べるまでもない。例えば、最新アルバムには *L'NMIACCD/HTCK72KPDP* と題する曲がある。これは Solaar による «L'ennemi a cessé d'acheter ses cassettes de cape et d'épée» (「敵は美女と活劇のビデオカセットを買うのをやめた」)の「音訳」。まさに Raymond Queneau, Georges Perec の弟子を自負するに面目躍如たるものがある。次に引用する *Séquelles* の一節もことば遊びの本領を恋の痛みという文脈に見事に生かしている。舞台では迷彩のアーミーパンツ1枚で、しなやかな身体を自在にメロディーに泳がせていた。

J'en garde les séquelles mais je sais  
qu'elle sait

Que le silence est d'or  
Est d'or, alors je me tais

ぼくはそのときの後遺症を引きずったまま  
だが、「沈黙は金」ということを  
あの子が知っているのは承知さ、  
だからぼくは黙ってよう。(Séquelles)

Francofolies '95 の中から、次に採り上げたいミュージシャンは、1947年生まれアルザス育ちの、ヴィロードの声のロッカー Alain Bashung という人物だ。長く苦しい下積み時代を経て Gaby oh! Gaby (1980) のヒットでようやくフレンチロックの表舞台に躍り上がり、その後 Bob Dylan などの影響の窺える *Osez Joséphine* (1989) のヒットにより、その地位を堅固なものとした。Bashung は独学の人ながら、言語へのこだわりが強烈で、ことばの音や多義性と戯れることを好み、時にはフランス人にも晦渋なテクストを生み出す。因みに最新アルバムの“Chatterton”に収められたヒット曲 *Ma petite entreprise* を作曲するにあたって、Bashung はまず経済用語、とりわけ不況にまつわる語彙を収集し、そこからイメージを編んだという。更にそこに官能の世界を…。経済とエロスの絡み合う世界の魅惑。幸いなことに、彼の「零細企業」はこの不況にもかかわらず好況を続けている。そのエスプラナードでのコンサートだが、観客とのコミュニケーションをスペクタクルの次元にまで変容させる Jacques Higelin とは対照的に、Bashung のスペクタクルは観客とコミュニケーションを断絶する地点から出発する。群衆の中での孤独を味わう Bashung。奇妙にもそれは、傲慢とはいえないものの、ある種の気位の高さを感じさせる。

Ma petite entreprise  
Connait pas la crise  
Epanouie elle exhibe  
Des trésors satinés  
Dorés à souhait

ぼくの零細企業は  
不景気知らず  
花開き、  
お望み通りに金色の

サテンの宝物を見せびらかしている

(*Ma petite entreprise*)

ロックとくれば、今や Patrick Bruel を語らずにはいられない。1959 年生まれで、1984 年に歌手デビューし、映画俳優としても活躍、たちまちティーンエイジャーの熱狂的アイドルとなった Bruel. Patriiiiick! 現象を作り、Bruelmania という新語まで生み出した Bruel. だが、今年 37 才という年齢のためか、“Alors regarde” (1989) に見られた「かわいらしさ」は、すっかり影を潜めてしまった。NY で録音した最新アルバムはその名もズバリ“Bruel”。ちょっと舌足らずな軽いノリのポップスから路線を変更して、大人向きの(?)ハードロックへと変貌しようというのか。中でも秀作は、ベルリンの壁の崩壊に着想を得た *Combien de murs?* これは Bruel が作詞作曲を担当し、そのテキストは Francis Cabrel の趣もあり、Bruel の成長を顕著にあらわしている。

Combien de murs se cachent derrière un mur qui tombe?

Des larmes peuvent couler, personne se retourne

L'histoire abandonne les pages qu'on détourne

崩れ行く壁の背後には、いくつの壁が隠れているのだろう

涙を流しても、振り向く者は誰もいない

歴史は人々の変えたページを捨て去る

(*Combien de murs?*)

エスプラナードの舞台上 Bruel は、セネガルのミュージシャン Youssou N'Dour、ライの帝王 Khaled とのジャムセッションを実現し、フランス語が、政治的次元だけではなく音楽文化の場でも、地中海を越える共通の言語となりうることを身をもって例証していた。最後に、このフェスティヴァルが若き



Patrick Bruel

才能にとつての跳躍台となりうる希望として、Yassine Dahbi を採り上げたい。モロッコ人の父とイギリス人の母を持つ Yassine は、7 月 15 日市営劇場小ホールに登場し、両親いずれの母語でもないフランス語でその世界を歌い上げた。イギリスのポップスの軽やかさとテキスト重視のシャンソン・フランセーズの伝統が調和し、アコースティックな魅力は耳に優しく、親密な空間に相応しい。アルバム“Des jours meilleurs”の1曲め *Des gens comme les autres* は、若い二人の愛を歌っているが、牧歌的というにはほど遠く、現代の若者の抱える日常の閉塞感そのものが静謐なメロディーに運ばれてくる。

Elle est au chômage

Et moi, je n'trouve rien

Il paraît que c'est de notre âge

Que personne n'y peut rien faire

Parce qu'on est des gens comme les autres

彼女は失業中

ぼくには、何も見つからない

ぼくらの年代にあっては

誰も何もできないらしい

ぼくらはフツウの人間だから (*Des gens comme les autres*)